

2023 年度エルムズカレッジ短期派遣研修



文化学部 213095 H.N



私は、2月21日から3月7日まで、アメリカの今回のエルムズカレッジ短期派遣研修から、日本と異なるアメリカの文化について、自分自身について多く学んだ。まず、この研修では、アメリカのマサチューセッツ州にあるエルムズカレッジに2月21日から3月2日まで、大学の学生寮にフレンドシップパートナーと相部屋で泊まり、授業でアメリカの文化について学んだ。アメリカの文化について座学だけではなく、実際に教会に参加したり、アメリカンホリデーを体験したりすることで学ぶこともできた。また、現地の病院や小学校、福祉施設に実際に訪れ日本との違いを、実際に見て学ぶことができた。休日や授業外の時間では、現地の学生とショッピングモールに行ったり、ご飯を食べに行ったりし、授業外でも現地の同世代と楽しみながら文化の相違点について学ぶことができた。エルムズカレッジで学んだあと、ボストンに移動し約3日間自由行動があり、観光を行った。

私がこの研修で学んだことは、4つある。今回の研修では、各学部にあった施設に訪れた。まず、病院では、医者や看護師だけでなく、栄養士や社会福祉士がいるということである。社会福祉士は、患者の家族と話し、サポートする役割を行っていることを学んだ。病院と患者さんやその家族との間を取り持つ重要な役割を果たしていると感じた。日本と異なると感じたところは、セントラルエリアといったスタッフが控えている場所のまわりに、病床があり、患者に何かあった際にすぐに対応できるようになっていた点である。また、英語以外の言語を話すことができるスタッフがいて、国籍が異なる場合でも対応できること、病院内にイスラム教やキリスト教など、宗教を信仰する場所があったという点も、多国籍、多文化社会のアメリカならではの特徴であり、この配慮や考え方はとても重要なものと思った。



次に、ホームレスの人や貧困層の人に向けての福祉施設に訪れた。ここでは、鑑別所や刑務所から出所した男性たちが社会復帰できるように、食事や衣類の提供、住む場所の提供を行っている。施設の利用者は、施設で行われている食事の無料提供の手伝いを一定期間行くと就職できるプログラムもあり、社会復帰のための手厚い支援を受けることができる。利用者の方たちはこれらの手厚い支援を受けることで、社会復帰を行うことが容易になるのではないかと思った。日本でも、ホームレスに関する問題は深刻なものであるが、日本で行われている支援をさらに広め、利用しやすい環境を作る必要があると思った。また、この施設の周辺には、フードバンクや、衣類や日用品を1ドル程度で提供してくれる施設もあった。支援施設が近くにあることは利用者の増加にもつながると思った。これらの活動は、キリスト教のすべて神によってつくられたものであるため恩恵を受ける必要があるという考えから来ているということを学んだ。



そして、次に訪れた小学校では、日本とは異なる点がいくつかあった。学校内に、本の自動販売機が置かれていたこと、学校内の壁には、ミニオンやマイクラフトといった小学生が好きなキャラクターが書いてあり、児童が学校に来たいと思える工夫がされていた。私が一番驚いた点は、学校が遅刻した児童また、早退した児童を数えている点、そして。児童がトイレに行く際、帰るってきた際に紙に名前を記入していた点である。生徒の管理が確実に行われていると思った。日本では、出席簿があったり、児童が教室を離れる際に担当教師に伝えたりするが、遅刻した児童を数えることや名前の記入は行わない。私は、この取り組みは学校が児童の状況を把握するために重要な取り組みだと思った。

さらに、施設訪問以外にも、アメリカで生活をしてみて日本人と考え方が異なるということに気づいた。日本人は、おしとやかさや周りとは合わせ同調意識の強いイメージがあるが、アメリカに暮らす人々は、自己表現がうまく、考え方もポジティブ思考の人が多く感じた。失敗してもいい、やってみるという気持ちが見受けられたと思う。私が学校で始めて出会った現地の生徒は、初対面でも気さくに話しかけてくれすぐに友達になることができた。私は、このとりあえずやってみる、ポジティブ思考が人生の中で大切だ考える。自分自身は、とりあえずやってみる精神を大切にしたいと思っている。

この研修で自分自身について考えてみた時に、自分自身で大切にしていることは、いろんなことに挑戦してみること、どのような環境でも自分から行動し関係を築きあげられることができるということであり、それが自分の強みだと思った。私は海外に何度か行ったことがあるが、毎回日本とは異なる体験ができ自分自身について学ぶことができたり、新しい発見ができたりすることがいい点であると思う。これからも海外に行ったり、海外の方と関わったりすることで自分自身の視野を広げていきたいと思った。

私はこの研修を通して日本との文化の違いを肌で感じる事ができた。今回の研修は、さまざまな施設に訪れたり、現地の生徒と一緒に生活したりすることで、深い学びを得ることができたとともに、自分にとって大切なアメリカの友達、先生ができたと思う。私は中学の英語教師になることを夢見ているのですが、生徒が海外に興味を持つような、英語の授業が楽しいと思ってもらえるような授業を作っていきたいと思う。今回の研修で実際に自分が経験したことを生徒に伝え、実際に海外に近い存在だということに気付いてほしいと思う。そして今回の研修で出会ったすばらしい友達やすばらしい経験を自分の力にして、これからも様々なことに挑戦し、失敗を繰り返しながら自分自身が成長できるよう頑張りたい。



「2023 年度エルムズカレッジ短期派遣研修」

文化学部 213116 M.Y

1) 活動概要

今回の研修では、事前に行われた審査によって選ばれた 10 名が参加した。実際にエルムズカレッジへ行く前に、5 回のオリエンテーションがあり、アメリカ史の本を読み、要約する課題の提出、予防接種やパスポート、エルムズカレッジに提出が必要な書類の準備、日本食パーティで作る料理の話し合い、海外に行くにあたっての危機管理セミナーなどが行われた。

2 月 21 日(水)に高知龍馬空港を出発し、同日 21:30 頃にエルムズカレッジに到着した。エルムズカレッジでは、それぞれのフレンドシップパートナーが出迎えてくれ、部屋まで案内してくれた。私のフレンドシップパートナーは、ドミニカ共和国出身で 19 歳の Ismar で、彼女と私の二人部屋だった。長時間のフライトの後で疲労が溜まっており、頭が上手く働いていない状態で、彼女と英語だけで会話しなければならなかったため、最初は英語を聞き取り、自分の意見を英語で伝えることが非常に難しかった。

研修中、平日は、フレンドシップパートナーと朝食を食べ、英語の授業を受け、様々なアクティビティーに参加した。最も印象に残っているのが、日本食パーティで、Joyce 先生の家にお邪魔し、日本食をふるまった。私たちのグループは、ちらし寿司と餃子を作り、特に餃子が好評だった。休日は、ショッピングをしたり、ラウンドワンに行ったりしてフレンドシップパートナーとの交流を楽しむことが多かった。授業は、Joyce 先生が担当してくれて、アメリカと日本の文化の違いについて詳しく教えてくれた。授業は、日本人学生が英語で発言する機会を作ってくれていたため、英語で話す練習になった。特に印象に残っているのは、授業で Joyce 先生が言っていた「ある国の文化を学ぶときには、その国の人と関わるのが一番良い」という言葉だ。この研修中、私はエルムズカレッジの生徒との関わりを増やすことを意識していたが、そうすることで、アメリカで暮らす人たちの考え方や習慣などをより自然に学ぶことができた。インターネットや SNS が発達した現代では、他の国の文化について学ぶことができるブログや動画などが多くあり、異文化を知る一つ的手段として有効であるが、実際に現地の人たちと関わることの大切さを実感した。

2) 研修での学び・気づき

今回の研修で、初めてアメリカに行き、日本との違いを様々な面から感じる事が

できた。エルムズカレッジで出会った人は、アメリカで生まれ育った人は少なく、むしろ他の国で生まれ育ち、アメリカに渡って、第二言語として英語を習得した人の方が多い印象を持った。特にスペイン語を母語とする人が多く、病院に見学に行った際にも、英語表記とともに、スペイン語表記もあり、ヒスパニック系の人が多いことを実感した。高校生のとき、「アメリカにはヒスパニック系の人が多い」ということを教科書で学んだことがあり、頭の中で理解していたつもりでいたが、実際にアメリカに行き、ヒスパニック系の人と関わる機会の多さに驚き、日本との違いを感じた。また、チップ文化についても理解していたつもりだったことに気づくことができた。「アメリカでは会計の 20% をチップとして渡す文化がある」ということは、今まで日本で暮らしていても耳にすることがあったが、実際にアメリカで買い物をしてみると、日本の「当たり前」が染みついていた、チップを渡すのを忘れてしまったことがあった。自分の「当たり前」が他国では、失礼にあたるという、この経験は私にとって衝撃で、異文化を訪れていることをより自覚することができた。また、アメリカは低賃金で働かなければならず、チップがあるおかげで生活していける人も多くいるという現実を知ることができた。

エルムズカレッジの生徒には英語を第二言語として習得している人が多いと述べたが、英語だけでなく、多言語を話せる人や他の言語に興味を持っている人が多いことにも気づいた。実際、私のフレンドシップパートナーである Ismar も Duolingo という言語学習アプリでフランス語を勉強していた。また、日本の文化に興味があり、日本語を勉強し、日本で就職する人にも出会った。県立大学での短期研修に参加していた Charlotte が「日本に行ったとき、まるでアニメの世界に入り込んだように感じ、すごく感動した」と話していて、私がアメリカに行ったときと同じ感覚を彼女も抱いていたことに気づいて、憧れの場所を訪れた時に感じる感情は世界共通なのだなと思った。

アメリカに着いたばかりの頃は、英語を聞くのも話すのも難しいと感じていたが、アメリカで過ごし、フレンドシップパートナーと会話する中で、英語を聞き取る能力は各段に向上したのを実感した。二週間という短い期間では、英語で自分の考えを伝えることは、まだ難しかったが、日本にいるときよりも話せるようになったように感じる。また、フレンドシップパートナーと会話するときには、あらかじめ話題を用意しておくことが大切だと思った。美術やアニメ、ペットの話は誰とでも話しやすい話題だった。特に日本の文化に興味のある人には、巫女のバイトについて話すのが興味を持って聞いてくれて、会話が盛り上がった。上手く英語で伝えられないときには、写真を見せるだけでも、相手とコミュニケーションを取ることができることに気づいた。

3) その他

ファストフード店やショッピングモールなどは日本とほとんど同じで、グローバル化を実感した。また、日本の会社であるラウンドワンがショッピングモールのなかにあり、日本の会社も世界で通用することに驚いた。お寿司やたこ焼きなどがあり、日本食にもなじみがあるようだった。個人的に、イギリスにもあった wagamama という日本食屋がアメリカにもあったのが印象的だった。

4) 研修先の写真



1) 活動概要

2月21日から3月7日までアメリカの協定締結大学で提供されるエルムズカレッジの学習プログラムへの参加、講義等の聴講、病院や小学校、社会福祉を目的とした施設見学などを含めた総合的な観点でのフィールド実習を行った。現地の学生との生活を通じてアメリカの食生活や言語に触れ、異文化及び自文化の理解、異文化環境での耐性などを高めた。

2) 研修での学び・気づき

私がこの研修を通じて学んだことは、大きく3つある。1つ目は言葉が通じなくても伝えようと努力することの大切さである。私は研修に行くまで英語に苦手意識があり、研修で現地の人と上手く会話ができるか非常に不安を感じていた。初めて現地の学生の会話を聞いた際には、迫力と会話のスピードの速さに圧倒されていたが、自分の英語に自信がなくても、自分の知っている範囲の単語や文法、ジェスチャー、表情を使って伝えようと努力したことで現地の方とも意思疎通を図ることができた。間違えることを恐れず、積極的に思ったことや疑問に思うことを発言することで自然と英語に慣れていき、次第に英語への苦手意識が軽減しただけでなく、話すことを通じて英語を勉強することが楽しいと思うようになっていた。私の英語が間違っていた時にはフレンドシップパートナーに正しい言い方を教えてくれたことで、日本で勉強している時には理解できなかった英語も納得ができるようになっていた。例えば、私は以前 will と be going to の使い方の違いが理解できていなかったが、フレンドシップパートナーがどのように使っているか観察したり、実際に自分で使ってフレンドシップパートナーに説明したりすることで正しく使い分けることができるようになった。私のフレンドシップパートナーは私のつたない英語でも理解しようと耳を傾けてくれ、また私が理解できるまでゆっくりと説明してくれた。もっと英語を話せるようになってフレンドシップパートナーと話したいと思うようになり、これからも英語を勉強し続けようと思うモチベーションを見つけることができた。会話する際に大切なことは正しい文法よりも、その場を楽しみ、伝えようと努力することが大切であると感じた。

2つ目に、失敗を恐れず積極的に行動することの大切さを学んだ。私は今までも興味のあることには行動するように心が掛けてきたが、今回の研修でこのことの大切さや行動によって自分の視野を広げることができるということ改めて実感することができた。1年生の前期の履修登録の時に“私は英語を上手く話せないがアメリカに行ってみたい!!”という好奇心から登録したこの授業で日本の生活では絶対に見ることのできない景色や食べ物、素敵な友人と出会うことができ、アメリカに行ったことで分かっ

た日本の良さやアメリカの良さ、文化の違いを理解することができた。例えば、実際に私が感じた日本の良さは、食事が健康的で美味しいところと、礼儀や清潔感があるところである。日本の食生活は基本的に米を主食として、魚や肉、野菜、大豆を中心とした栄養バランスのとれた一汁三菜の食事である。アメリカの食生活に体験したことで、日本が世界有数の長寿国である理由は日本の食生活にあるということに強く共感し、納得することができた。また、日本には作ってくれた人への感謝を示すために綺麗に残さず食べるというマナーがある。これらの日本の文化の素晴らしさを実感し、より日本のことを好きになることができた。対してアメリカの良さは、挨拶が多いことと、周りの目を気にしないことであると感じた。アメリカでは“Hello”や“How are you?”といった言葉の挨拶だけでなく、握手やハグなど挨拶の方法も日本より多かった。また、友人や先生だけでなくお店の店員さんや通りすがりの人とも笑顔で挨拶を交わしていて、とても素敵な文化であると思った。挨拶の多さがフレンドリーな性格や人との距離感が近い要因になっているのではないかと感じた。また、アメリカで出会った友人達は自分の体型や髪型などを他人と比べることなく、ありのままの自分を愛し、自分のやりたいことを楽しんでいた。日本人は無意識のうちに、自分の行動や言動を周囲がどう思うかを気にしたり、その場の空気を読んだりする場面がよくあるのではないだろうか。アメリカでの生活はそういった場面が非常に少なく、とても生きやすいと感じた。アメリカの生活を想像はできても、このように実際に現地に行かなければわからないことや、初めての気づきが多く、行動することで自分の視野を広げることができたと考える。この研修期間は今まで生きてきた19年間のなかで一番刺激的で楽しい時間となった。

3つ目はアメリカの病院の多様性についてである。私は将来看護師を目指しているため Baystate hospital の見学は非常に興味深かった。私は以前まで働く医療従事者、患者ともに大半が日本人の病院しか見たことがなかったため、アメリカの病院は同じ病院でも全く別物のように感じる程新鮮だった。アメリカの病院には多種多様な宗教や言語、人種の患者さんが入院・通院されていた。看板には英語やスペイン語での表示があるだけでなく、常に患者さんのための通訳の方が存在し、ポーランド語、スペイン語、ギリシャ語、ポルトガル語、中国語、ベトナム語など言語に対応できるようになっていた。また、入院中であっても宗教を信仰できるようにするための部屋があり、全ての患者さんが安心して入院生活を送ることができるように配慮されていた。日本と同様にソーシャルワーカーの方と病院が連携して家庭内暴力やトラウマを持つ患者さんの生活を支援していることなど日本との共通点があることも理解することができた。今後看護師になって臨床で働く際、日本でも外国の患者さんと接する機会はあるだろう。そういった患者さんの身体だけでなく心のケアもできて、関わるなかで少しでも安心することができるような看護師になりたいと新たな目標を持つことができた。そのために、まず英語を理解できるようになるだけでなく、様々な宗教の

特徴や国の文化を広い視野と柔軟な心を持って勉強する必要があると気づいた。私は普段の生活では日本人と日本語で関わることしかないため、この研修で世界には多くの人がいるように様々な考え方や言語、価値観があること知り、世界の広さと多様性を感じる機会となった。日本人の当たり前の常識が海外では通用しないことがあるように、日本で生活していると無意識のうちに視野が狭くなっていることがあるだろう。研修を通じて、これからのグローバル社会を生きていくためにも、広い視野を持って常識を疑い、柔軟な考え方ができるような人になりたいと思った。

3) その他

最後になりますが、オバーク先生、林さん、ジョイス先生、ナンシー先生、今回の研修に関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

4) 研修先の写真





1) 活動概要

活動概要については、月曜日から金曜日は主に午前中か午後のどちらかで病院や教会、地元の小学校などの施設見学や、ESL (English as a Second Language) の授業を受講、アメリカへの移民として多い Irish の授業を受講するなどした。夜は American Holidays や Latin Dance Night、Movie and Games などのアメリカの文化体験を行った。平日の授業終わりには、Dinner までの空き時間に Friendship Partners と一緒にアメリカのスーパーである Walmart や日本でいうミスタードーナツのようなアメリカのドーナツ屋 Dunkin Donuts、本屋などに出かけ、交流した。休日は、1 人の研修生につき数名の Friendship Partners が付いてくれていたため、主に彼らと一緒に行動し、ショッピングモールや少し離れた街に出かけるなどして買い物を楽しんだ。

また、アメリカの文化を体験するだけでなく日本の文化についても興味を持ってもらうために Dinner で日本食を振舞ったり、日本文化である折り紙や書道、ひな祭りなどを体験できる空間を用意し、一緒に体験したりした。日本食体験については、アメリカに行く前のオリエンテーションでそれぞれのグループでつくる日本食について材料を調べ、アメリカでは買えない材料に関しては日本から持って行っただが、それ以外は現地のスーパーマーケットで購入した。料理を作るときは、思っていたよりも台所が狭かったことと（急遽教授の家に変更になったため）、作ろうとしている品数が多かったため、全ての料理を完成させることはできなかった。日本との材料の違いや食材の大きさの違いなどがあり、日本で食べられるものと全く同じものはできなかったものの、皆美味しいといって食べてくれたのは嬉しかったし、アメリカと日本の食文化の違いを感じることができた。日本文化体験では、折り紙と一緒に折ったり、現地の学生の名前に漢字を当てて書道で書いてプレゼントとして渡したり、ひな壇を飾ったりした。私は主に書道を担当したが、現地の学生たちは積極的に日本文化に興味を持ってくれて、漢字の意味を聞いてくれたり写真を撮ったりしてくれていた。漢字を当てるために字の意味を調べたことで、日本では意識していなかった字の意味を新たに知ることができ、日本についても改めて知る良いきっかけになった。

2) 研修での学び・気づき

【施設見学で学んだこと】

〈Baystate Medical Center での学び・気づき〉

Baystate Medical Center は高知県内にある日赤や医療センターのような病院で、マサチューセッツ州の中ではかなり大きい病院である。病院内は主に、小児科や緊急外来、重症患者の部屋に分かれている。アメリカの病院と日本の病院の違いの一つとして看護師などの服装の違いがあると思う。日本の看護師は、私が見たことがある限りでは白い制服が基本であるのに対して、アメリカでは役職によって制服の色が異なっており、看護師はロイヤルブルー、リハビリ系の看護師は薄い灰色、アシスタントは赤色に分かれていた。これは、医者や看護師の中で役職が分かりやすいだけでなく、患者から見ても誰がどのような仕事を担当しているのかが視覚から分かるという効果がある。また、日本との違いとして、患者の部屋は基本 1 人に 1 つが与えられている点がある。重症患者が多いという理由があるかもしれないが、日本ではカーテンで仕切った部屋が基本であり、かなり重症でない個室にはならない。患者のプライバシーが守られている点がとても良いと感じた。また、小児科には重症な子供たちの食事面をサポートするための栄養士の部屋がある。床や壁には子供が楽しめるような仕掛けがあり、病院内でも子どもが安心できる環境づくりがされていた。このような安心できる雰囲気づくりは日本の小児科でも、子供用スペースがあったり壁に絵が描いてあったりするため、行われていると思う。しかし、アメリカの小児科では大人の重症患者と同様に基本 1 人部屋があるのに対して、日本の小児科は違うため、子どもだろうが大人だろうがそうした配慮がなされていることは素敵だと思う。また、子どもから老人まで家庭内暴力などの問題があれば、市役所と連携し、相談を受けるなどの対応も行っている。家庭内暴力などの問題に関しては、日本だと病院ではなく専門的な機関に相談することが一般的なイメージとしてあったため驚いた。病院内には、子どものためのぬいぐるみやアクセサリなどが売っている売店もあり、日本とは売られている商品の違いを感じた。さらに、日本の病院と大きく異なると感じた点は、病院内にチャペルがあることである。様々な宗教が入り混じるアメリカならではの特徴であると感じた。チャペル内には様々な言語で書かれた聖書や祈りのための書籍や、イスラム教のメッカのために仕切られたスペースがあり、どんな宗教にも対応できるような体制が取られていた。そのような様々なニーズに対応するための選択肢が日本よりもアメリカは多いと感じた。そうした教会だけでなく、病院内で提供される食事の種類も選択肢の一つであると感じた。(例えば、ベジタリアンやヴィーガン用のメニューなど)

〈Bowe Elementary School での学び・気づき〉

アメリカの小学校と日本の小学校は、教室内の構造や 1 クラスにつく先生の数などは同じだが、違いとしてカラフルさがあると感じた。まず、アメリカの小学校は壁にたくさん

の絵や文字が書かれていて、例えば励ますようなポジティブな言葉やいじめをしないといった直接的な言葉、映画やゲームのキャラクターが書かれていた。目に入るいたるところにポジティブな表現がされているのは日本の小学校ではあまり見ないため、アメリカらしいと感じた。また、日本の小学生から高校生までの子どもは学校での掃除を自分ですのに対して、アメリカでは自分で掃除をしないという点も異なる点のひとつである。クラス内には、色んな髪色、肌の色、目の色をした子供たちがおり、アメリカでは小さいころから様々な文化を経験する環境にいと改めて感じた。

〈Province Ministries での学び・気づき〉

ホームレスや薬物中毒者のための施設で、彼らの健康的な生活を目指すことを目的として作られた。カトリック系の女性たちによってつくられた団体で、国からの支援はないため教会への寄付などで活動している。冬は教会をホームレスのための家として使ったり、フードワークスというトレーニングプログラムがあり、8週間分の訓練を終えたら資格がもらえるため仕事に就くことができるような斡旋的な活動も行っている。この施設は男性に限定されており、直接刑務所から来る人もいるため、そのような人たちが最低限の生活を送ることができるよう準備している。また、食堂は誰でも利用でき無料で食べることができる。ボランティアの人たちやその施設のトレーニングを経て資格を得た人たちが一緒に働いている。食堂内のキッチンでは料理の資格を取ることができるようになっており、オーブンや冷蔵庫などの電気製品は使われなくなったものを再利用していた。Food Pantryというフードバンクの施設には、ボックスで食べ物が届くようになっていたり、食べ物だけでなく雑貨や薬などの日用品から、洋服まであった。また、特に印象に残ったのは、貧しい家庭の子供に裕福な家庭の親が代わりに誕生日プレゼントやクリスマスプレゼントなどを購入するシステムである。アメリカは貧しい家庭などに対する国からの支援が十分ではなく、民間や個人による寄付で貧困などがまかなわれている部分があるため、個人同士で助け合うという精神が当たり前にあるということを感じた。日本にもホームレスは存在するが、そうした人たちを支援する団体や施設が大々的に紹介されたりしないため、知らない人も多いと思う。それに対してアメリカは明らかに目に見えてホームレスの数が多いことや社会福祉制度が充実していないという点から個人による支援の影響力が強いいため、このような施設の存在が貧しい人にとって重要となると感じた。

【生活している中での学び・気づき】

アメリカの様々な施設には、車いすを使う人のための自動ドアボタンがあらゆるところにあると思った。日本にもバリアフリーに対応した施設や設備はあるが、大学など学校にも車いす専用ボタンがあるという点は日本では見たことがなかったため驚いた。多様な文

化を背景に持つ人たちがたくさんいるからこそ、高齢者や障がいを持った人、子どもなどへの配慮の意識が高いのかなと感じた。また、アメリカにはベジタリアンやヴィーガンなど食に関する独自の好みを持った人が存在する。そのようなベジタリアンやヴィーガンは必ずしも食の好みというわけではなく、その背景には宗教やその人の社会問題などへの配慮がある。アメリカのレストランなどではそのような人たちに向けたメニューがあり、自由に選べるようになっている。日本にはまだそうした点への理解が進んでいない印象があり、選択肢が少ない点は未だ少数派の人にとっては困難な部分であると感じた。

またアメリカの人達は、皆自信をもって発言したりあらゆる活動に参加している印象があった。英語を少し間違っても大丈夫だよや、英語上手だよと声をかけてくれるため、日本人特有の周りを気にするということがすごくもったいないことであると感じるようになった。まだ周りの目が気になることはあるけど、自信をもっていろんなことに挑戦していこうと思えるようになった。また、知らない人にも話しかけてコミュニケーションを取るカジュアルさもアメリカの良いところであると感じた。日本は、だんだん知らない人とのコミュニケーションを取らなくなっていており、他人は他人という冷たい感じがするため、知らない人にも挨拶したり気軽に会話するアメリカのスタイルは人とのつながりが薄れてきた日本にとって大事な考えだと感じた。

3) その他

海外に行くときは、日本食や飲み慣れた薬を持っていくことの重要性を感じた。また、スマホが街中で使えないことはかなりストレスになるため、海外に行く前に使えるように変更することも大切だと思った。

(1) 活動概要

2024 年 2 月 21 日から 3 月 2 日の 10 日間協定締結大学であるエルムズカレッジで生活し、3 泊 4 日のボストン観光に行った。

- ・Japanese celebration (ひな祭り、習字、折り紙) , Japanese dinner (餃子、ちらし寿司、(おにぎり)、肉じゃが、お好み焼き、たまごスープ)
- ・American holidays(イースター、ハロウィーン、クリスマス)
- ・Irish/UOK English class (アメリカ・アイルランドの歴史や文化の違いについて)
- ・Catholic Mass (学校内にある協会での)
- ・Baystate medical center, Bowe elementary school, Providence ministries
- ・Latin dance night, Karaoke
- ・Holyoke mall, Springfield museums, Northampton to go shopping
- ・Game night (uno やボードゲームで遊ぶ) ,friendship partner night(映画)
- ・Black exp summit (Forging democracy: Black womanhood and the long march for civil rights)

(2) 研修での学び・気づき

初めてアメリカを訪問して、エルムズカレッジの学生と関わったことでたくさんの学びがあった。まずは、人から学んだことである。エルムズカレッジで出会った人は総じてフレンドリーなところが印象的だった。私と初めて出会った人も気さくに挨拶を交わし、当たり前のようにドアを開けてくれ、私がドアを開けたときは必ず Thank you と返ってきた。会釈などで済ませると相手の視界に入っていなかったりすることもあるため、口に出してお礼をすることでお互いに気持ちが良いのではないかと思った。フレンドシップパートナーという特定の人だけではなく、イベント等に参加していた学生とたくさん関わることができた。

日本では、上下関係や仲の良さで話し方や行動が変わるのに対して、アメリカは、みんな知り合いなのではないかというくらい仲が良いように思えた。学生同士だけでなく、学生と先生の距離も近く、教える・学ぶという関係性だけでなく、相談しやすい・頼りやすい間柄に魅力を感じた。学生は資料や自分のしたいことができる環境をつくって欲しいなどの依頼をし、先生は学生の持った力を発揮できるように働きかけていた。アルバイトなのか、先生の右腕となり、サポートをしている学生もいた。先生の家でパーティをしたときは、先生が歓迎してくださること、そして大人数の学生がくつろげるくらいの広さであることに驚いた。困っていたらすぐ気にかけてくれ、英語で伝わらないときもしっかり聞き、簡単な英語に変えてくれることもあった。また、誰かがくしゃみをしたときに Bless you と言っているところを生で見た。エルムズカレッジ内ではどこで

もその様子が見られ、しゃべっている途中でも、トイレやテスト中にも言っていると聞いた。決まり文句ではあるのだが思いやりを感じることができた。

次に気づいたことは自分より意志のはっきりと持った人が多いことである。Yes/Noをはっきりと伝える国、ということは知っていたが、他にも将来の夢や好きなものをはっきりと持ち、それらを堂々と主張しており、かっこいいと思った。アメリカでは、日本に比べて自己責任への概念が強いと思う。学生は、自分の取りたい授業を選択し、時間割をつくることができる。これは日本でも同じことであるが、アメリカは自由時間がより多いと感じた。資格を取るためには必然的に授業数や課題が多くなるが、アメリカで過ごしてみてその差を感じた。彼らは、その空き時間にボランティアやアルバイトをして、社会参加を図っている。学校の先生になりたい人はボランティアで自分の趣味を生徒に教えたり、アルバイトで高齢者や子どもの世話をしている人がいた。他にも、小学生のときから髪色や化粧をしていくことができる。露出しすぎない・禁止用語の載った服などふさわしくない格好は制限があるが、自分らしさを表現する力を小さい頃から養い、前向きな思考を持つことができる気がした。また、食事についても自分で決めることが重要であった、カロリーなどが表示されている上で、気分等に合わせて、自分のスタイルの食べ物を選ぶことができる。病院でも管理はされているが、自分の好ましいもの（コーヒーやお菓子）を食べることができる。これらの自分で選ぶ習慣が私にとって自由が多いと思うきっかけになった。そして、自分で取捨選択をするからこそ、自我が生まれ、個性が表れるのだと感じた。

3つ目に切り替えの速さである。エルムズカレッジを訪問したとき、学生たちはテスト期間で忙しいときだった。毎回笑顔で話しかけてくれ、どこかに行こうと誘ってくれたが、「課題がある」と帰って行く姿も見た。優先順位を考えて動いており、楽しむときは思いっきり楽しみ、頑張るときは一生懸命頑張るというスイッチがあるところを見習いたいと思った。そして彼らの性格等から年間行事もたくさんの人が祝おう・盛り上げようと参加するため、盛大に開かれるのではないかと考えた。Providence ministriesを見学したときに、困っている人のためのシェルターや服・食べ物があつた。これは日本と似ている部分だと思ったが、クリスマスに自分の子どもにプレゼントを渡すことができないときも訪問し、安価（ときには無料）で探すことができると聞いた。また、プレゼントを自分で買えない親に代わって、ボランティアをしている人が買うというシチュエーションもある。このことからクリスマスがいかにアメリカの人びとにとって大事な行事なのかが分かった。また、日本では「最低限度の生活」と考えると娯楽は後回しというイメージが強いため、アメリカでの楽しみを生む考え方に興味を持った。

最後にチップを渡す文化である。私は、チップは、店員さんの接客態度が良かったときに直接渡すもので、特別な時にしか渡さないものだと思っていた。しかし、チップボックスがあるだけでなく、クレジットカードで支払うときに金額の何%をチップにするかという段階があったり、注文した際にチップが勝手に含まれているお店があった。

チップは、アメリカではサービス業で働く人々にとって、支払われて当然だと認識されており、少し強く言うとサービスを受けた側の義務のようなものと分かった。チップはサービスの評価を表しているものではあるが、ゼロではない。このチップはそこで働いている人たちの生活費の一部になっており、大切なものであるため、金額の10-20%程度をチップとして払うことが好ましいと理解した。アメリカのものはすべて日本のものと比べると大きく、その分、値段も高かった。賃金だけではまかなえない部分をチップで補っていることを初めて知った。日本に帰ってからの報告会で、アメリカとヨーロッパでもチップに対する考え方が異なっており、チップは募金なのかという疑問も浮かんた。チップという新しい文化を知った今、アメリカでの正しい渡し方を学び直し、他国はどのような対応が為されているのか調べてみたいと思った。

(3) その他

今回の研修では、新しい出会いの素晴らしさ、たくさんの人と笑い合うことの楽しさ、言葉の壁から会話することの難しさなど様々な学びがあった。そして、たくさんの方々にお世話になった。エルムズカレッジの学生や教員の方々はもちろん、訪問先の方々にもお世話になった。引率してくださったオバーク先生をはじめ、国際交流課の方々、そして研修を共にした高知県立大学の学生にとっても感謝している。短い間でしたが、ありがとうございました。この短期研修で学んだことを今後の自分の生活に活かしていきたい。また、新たな地に踏み入れ、視野を広げていきたいと思った。

(4) 研修先の写真



1. 活動概要

集中講義 異文化理解海外フィールドワークを受講し、約 2 週間アメリカで過ごした。2024 年 2 月 21 日～3 月 2 日の期間エルムズカレッジに滞在し、英語でのコミュニケーションスキルを磨くとともにフレンドシップパートナー（以下 FP とする）とゲームやカラオケなどで交流を深めた。アメリカに残る様々な文化（アイルランドのダンス、歴史の学習など）を体験し、私たちも和食をふるまうなど互いの文化に触れあう異文化交流を行った。それだけでなく、大学周辺の病院や美術館、小学校、さらには福祉施設などを訪れアメリカ、日本の相違点を幅広い分野から見つけることができた。先生方が引率してくださる活動以外にも、自分の FP と夜ご飯を食べたり映画館やゲームセンターに出かけたりする Friendship Partner Night というイベントが組み込まれており、空き時間で FP と両近くのドーナツ屋さんへ行くといったこともできた。

また、一日に 1 時間半ほど県立大生向けの授業があり、FP とともにアメリカの歴史背景や文化について学んだ。最後の授業でエルムズカレッジでの生活についての感想などをまとめたスピーチを作成し、同日開催されたフェアウェルパーティーで県立大生一人一人が発表した。なお、このパーティーではフォーマルな服装が必須となっていた。

3 月 3 日～6 日、エルムズカレッジを出発しボストンで観光を楽しんだ。3 日は先生の引率のもと街を散策し、歴史的な建造物を複数訪れた。4 日、5 日は 3 つほどのグループに分かれボストン公共図書館やニューイングランド水族館などを訪れ、活気あふれるボストンの雰囲気を実際に味わえたのが印象的だった。ボストンはロブスターが有名であり、またボストン茶会事件の舞台であることからこれらがモチーフとなっているお土産が豊富に売られていた。街を歩いているとお土産ショップが多くみられるため、ショッピングも楽しめると考える。

2. 研修での学び・気づき

私はこの研修を通し、自分たちの当たり前はごく限られた小さなコミュニティの中で形成されているものであり、国が異なるとそれが全面的に覆されることがあると実感した。

最も衝撃を受けたのは一つの国に人種問わずあらゆる人々が生活していた点である。FP たちに彼らのルーツを訪ねた際、ドイツ、ベトナム、プエルトリコ、メキシコなど様々であった。特に私たちが滞在したエルムズカレッジが位置するマサチューセッツ州ではヒスパニック系の人口の増加が目立ち、なかには小学校に入学した生徒のうち 60%がヒスパニック系であった地域も存在する。ルーツや価値観、肌、髪の色が全く異なる人々と同じ場所で共に生きている部分が日本と大きく異なる点であり、そのことを自国のアイデンティティだとしてとらえている人々が多いように感じた。アメリカの文化は具体的にどのようなものなのか、と考えたとき今一つピンとこないのは、数多くの文化が混在する中それを受け入れ、尊重しあう人々の姿勢があるからではないかと考えさせられた。

また、日本にいる間はさほど重要ととらえていなかったチップという制度についても考える機会となった。チップとは接客を担当してくれたスタッフに敬意や感謝を示すために定価よりも少し余分な金額を支払うといった日本にはあまりなじみがない慣習で、定価の 10～20%が相場とされている。当初、私

は余分にお金を払う必要性を理解しておらずあまり気が乗らなかった。しかし、アメリカ滞在中チップは接客業で生計を立てる人々にとってなくてはならない存在であるということを知ることができた。スタッフの賃金は他の職業に就く者と比べはるかに低く、チップが彼らの生活をつないでいることも少なくないようだ。個人的に調べてみると、チップで余分に収入を得ることを想定し賃金が低く設定されていることもあるとわかった。「余分に払う」というよりは「定価＋チップ」で本来従業員に払うべき額になる、ととらえることもできるかもしれないと考え方を変えるきっかけとなった。

エルムズカレッジ滞在中、福祉施設を訪問することができたのだが、ここでも新たな気づきをたくさん得ることができた。アメリカは日本よりも資本主義の色が強く、経済格差が深刻な課題となっている。貧困が原因で満足な暮らしを送ることが困難な人々のために、大きな福祉施設が建てられるようになったようだ。私たちが訪れた施設はカトリック教女性グループにより設立されたとされ、寄付により運営されていた。服や食事を提供するほかレストランで働くためのトレーニングプログラムといった就職の手助けなども行い、クリスマスには子供にプレゼントを買い与えることができない親のため寄付で子供が欲しいものを買ってあげるという。お金や物資といった一時的な援助だけでなく、働くことでその人が長期的にお金を得ることができるよう支援が行われている部分に感銘を受けた。金銭面での問題を抱える人々だけでなく、アルコール・ドラッグ中毒を治療する施設としても機能しており、患者は半年から1年施設に滞在する。対象者は男性のみであることが印象的だった。ヒスパニック系の人口が増加していることから、英語だけでなくスペイン語での支援も行われており、この部分にアメリカの特色が顕著に表れていると感じた。

3. その他

この項目では、私がアメリカでの滞在中で学んだ英語のフレーズやスラング、さらには2024年度異文化理解海外フィールドワークでアメリカに滞在される予定の方に注意していただきたいことを以下まとめる。

① アメリカで学んだ英語フレーズ・スラング

エルムズカレッジで私がFPから学んだ最初のフレーズは“I got it.”である。これは「わかった」という意味で、FP同士の会話中よく耳にした表現である。私はこのフレーズを知る前は“I understand.”などを使っていたが、アメリカでは実際に聞く機会がなかったため、同級生との会話などくだけた場面での会話では“I got it.”を使うようになった。また、getはFPとの会話中よく耳にする単語であり、何かを買ったことを伝えたいときもbuyよりもgetのほうが多く用いられている印象だった。そのほかにも「～したい」と表現する際want toではなくwannaがよく使われており、日本にいる間はよく使っていた表現でも英語母語話者の間ではさほど使われていないと感じる機会が多々あり、面白さを感じた。

また、FPが教えてくれたスラングとして“slay”、“munch”などがある。“slay”はアメリカに行く前からYouTubeなどのコメントでしばしば目にしておなじみがあったため、はじめてFPの口から聞いたとき感動したことが印象に残っている。もともとは「～を殺害する」といった意味であったが、最近では「かっこいい」「うまくいった」などを意味するスラングとして使用されているようだ。“munch”は「食べ物をむしゃむしゃと食べる」様子を表現する際に用いられるスラングだそうだ。アメリカの人々が実際に使っているスラングを知り、実際に使うととても喜んでもらえるが、中に

は不適切な意味のものもあるため意味をしっかりと理解することが不可欠だと感じた。

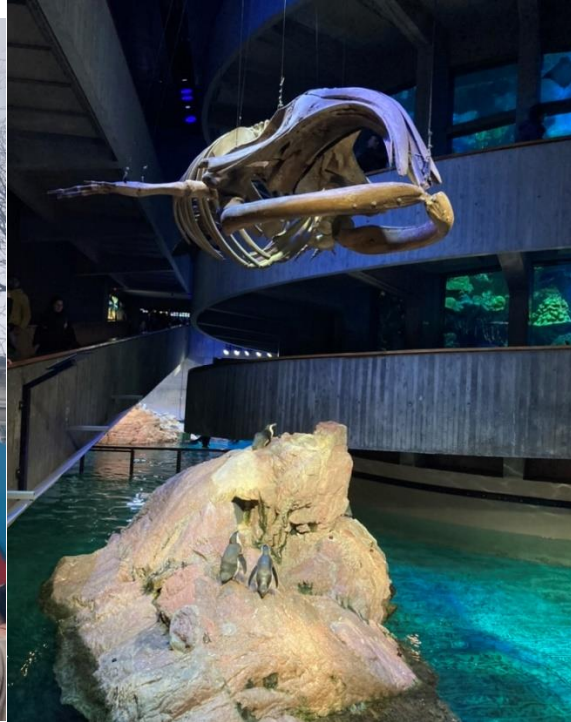
② アメリカへ行く前に気を付けてもらいたいこと

私が今年度アメリカへ行く予定の方に気を付けてもらいたいこと、それは事前にワクチンをいくつか接種しておく必要があるということだ。アメリカは州ごとに接種が必須になってくるワクチンが違い、私がこの研修中滞在したマサチューセッツ州では B 型肝炎や水疱瘡、その他多くのワクチンを接種し、証明書を提出しなければならなかった。提出する必要がある書類はワクチン接種証明書に加え健康診断書なども含まれているが、医師に書いてもらわなければならない書類が複数あるので、オリエンテーションの後提出書類を受け取った場合は、医師に書類を見せながら相談しに行くといい。指定されているワクチンを 1 回接種していたとしても、種類によっては 2 回、3 回と複数の接種が必須となるものもあるため注意が必要である。1 回目と 2 回目の間に空けておかなければならない期間なども存在するので、説明書類（おそらくオリエンテーションで配布され、詳しく説明を受ける）を確認しながら早めに準備されることをお勧めする。

また、アメリカへ行く前にネイティブの話す英語にふれておくことをおすすめする。アメリカにいった当初、英語母語話者の話す英語は発音も早さも日本のリスニング教材で聴くような英語とあまりにも違うことに驚いた。私は英語系の授業をとっておりネイティブの先生の話される英語を聴く機会があったこと、また英語字幕で洋画を見ることが好きだったことから慣れるのにさほど時間はかからなかったが、「英語母語話者が話す英語」に耐性がなかった場合非常に心細い思いをしたのではないと思う。日本を発つ前に少しでもいいので英語を聞き取る練習をしておくといいかもしれないと感じた。スティーブ・ジョブズやエマ・ワトソンのような著名人のスピーチを字幕付きで見るといった方法も実践していたが、個人的には先生におすすめしていただいた「洋画を英語字幕で繰り返し観る」という方法は勉強している感覚がないのに繰り返し行っていると徐々に聞き取ることができるようになったので非常に効果的だったと思った。

4. 研修先の写真





2023 年度エルムズカレッジ短期派遣研修

健康栄養学部・236022・T.H

1) 活動概要

今回の短期研修は、2024 年 2 月 21 日から帰国する 3 月 7 日までの約 2 週間のアメリカ、マサチューセッツ州での研修であった。

初めの約 10 日間はエルムズカレッジに滞在し、現地の生徒と共に生活をした。部屋は現地の生徒と 2 人部屋であった。以下がエルムズカレッジでの研修内容である。

- 1 日目 フレンドシップパートナーと会い、寮の部屋に向かう
- 2 日目 オリエンテーション、キャンパスツアー、英語の授業、夕食後ゲーム
- 3 日目 英語の授業、黒人問題サミット、アメリカンホリデー
- 4 日目 バレーボールゲーム観戦、日本食パーティ
- 5 日目 ショッピングモール、カラオケパーティ
- 6 日目 現地の病院見学、英語の授業、フレンドシップパートナーとの時間
- 7 日目 英語のクラス、日本の行事体験会、Irish/Japanese ダンス、ダンスチームの練習に参加
- 8 日目 Irish Class、教会訪問、英語の授業、Good bye dinner、
- 9 日目 現地の小学校訪問、英語の授業、ラテンダンス
- 10 日目 Holyoke の社会福祉施設訪問、英語の授業、
- 11 日目 Northampton の美術館や博物館、街に行った
- 12 日目 朝 7 時に学校を出発してボストンに向かった

エルムズカレッジでの研修を終えた後は、高知県立大学の生徒 10 名と引率して下さった先生 1 人でボストンに移動し 3 日間過ごした。そこでは、マサチューセッツ州議事堂などの歴史的建物を見たり、ハーバード大学やボストン美術館、クインシーマーケットやビーコンヒルなどを訪れたりした。その際アメリカのバスや電車にも乗ることができた。また、ボストンで有名なロブスターやクラムチャウダーなどを食べることもでき、現地ではできないことをたくさん体験することができた。

2) 研修での学び・気づき

今回の研修での学びや気づきについて三つに分けて述べる。

一つ目は日本人との考え方の違いについてである。今回の研修でたくさんの人と話をすることで、アメリカには自分自身の考え方やルーツなどの自己同一性に自信を持っており、自己主張できる人が多いように感じた。英語の授業で自分の国について話をする機会があった時、現地の生徒たちは自分の国についての知識をたくさん話していて、またそれらに誇りを持っているようにも思えた。他にも、自分の出身地の話や親の出身地の話などを友達同士の会話でしている場面も何度か目にし、日本では見慣れない話の内容に驚いた。

また、アメリカにいる人たちは日本人と比べてとてもフレンドリーだと感じた。学校内を歩いていると、初めて会った人にでも“Hello”と声をかけてそこから話が始まったり、学年やクラスの違いなど関係なく楽しそうに会話をしたりと日本ではあまり見ることのない光景を当たり前のように毎日見たり、それを体験することができた。また現地の大学の授業を受けてみて日本との違いに気がついた。日本だと生徒が先生の話静静地に聴くだけのことが多く自ら発言したりすることはあまりないが、アメリカでは先生と生徒の距離が日本よりも近く、参加型の授業に近いように感じた。例えば先生が何か質問をした時には積極的に自分の意見を伝えることが多く、また生徒同士の話し合いの時も自分の意見を伝える人が多いことに気がついた。日本では恥ずかしがって話さなかったり、自分の意見に自信がなく伝えることを拒んだりする人が多いように感じるし自分自身もそのような時があるが、まずは伝えることに意味があり大切であると学んだ。

次に、日本との食文化の違いについてである。まず一番驚いたことはアメリカでは食べ物を残す人がとても多いことである。アメリカで2週間過ごしていて、食べきれなかった食事を残したり、捨てたりする場面をほとんど毎日見た。食事を残すことは良くないこと、失礼なことだとされている日本ではあり得ない光景でとても驚いたことを覚えている。私はこのようなことから、アメリカと日本では食に対する価値観に違いがあるのではないかと考えた。さらにアメリカでの食文化にはどのような歴史が関わっていて、何がそうさせているのかに興味を持った。また、食事バランスにも違いがあることに気がついた。日本では主食、主菜、副菜が揃ったバランスの良い食事が基本とされていて栄養バランスが整っていることが多く、多くの人が健康を気にして食事をしている。それに対してアメリカでは、ピザやハンバーガー、フライドポテトなどの油分の多い食べ物を食べることが多く、バランスの良い食事が少ないように感じた。夜中に大きいピザを頼んで食べることもあり、好きな時に好きなものを食べるという感覚が日本とは異なることだと身をもって体験した。他にも、日本に比べてレストランやご飯屋さんでヴィーガンやベジタリアンのための食事の選択が多いことにも気がついた。例えば、ご飯屋さんのメニューにはベジタリアンやヴィーガンが食べられるものには分かりやすく印がついていたり、店員さんにベジタリアンが食べられるものはどれかと聞くとスムーズに答えられたりと、理解が進んでいるように感じるとともに日本が遅れていることに気づいた。

次に短期研修に参加する前と後での自分自身の考え方の違いについてである。私はこの研修に参加する前は、現地の人と会話をするためには正確な英語の発音が必要で、正しい文法で話さなければならないと勝手に考えていた。しかし実際にアメリカに行ってみると、拙い英語で話していても頑張って話そうとしていれば聞いて話を聞いてくれたり、「ゆっくりでいいよ」と言ってくれたりした。今まで学校で習った英語をいかに正しく使って話すかが大切になってくると考えていた自分を情けなく感じたと共に、現地の人とコ

コミュニケーションをとる際に最も大切なことは発音や文法などではなく、「話そう」「コミュニケーションをとりたい」とする自分自身の意識であることを学んだ。恥ずかしがって話さないでいてはいつまで経っても話すようにはなれないし、うまく話せなくてもまずは伝えてみることに、「これやってみる？」と聞かれたら挑戦するなど、積極的になることが大切だと感じた。この先日本にいても、たくさんの外国人に出会い、話す機会があると思う。そんな時には自ら積極的に話しかけるなど、外国人とのつながりを大切にしていきたい。

3) その他

慣れない生活リズムや食生活、文化の違いや言葉の壁に何度も心折れそうになることはあったが、目で見て耳で聞いて現地でしか体験することができないことを実際に体験することができてとても嬉しく思うと共に、自分の知らなかった日本以外の世界を知ることができ、広い視野や考え方を持てるようになったと考える。今回の研修で自分が感じたこと、学んだことを思い出だけで終わらせるのではなく、これからもこの経験を活かして、たくさんのことに積極的に取り組んでいきたい。

4) 写真など



「2023 年度エルムズカレッジ短期派遣研修」

看護学部

234050

N. M

1) 活動概要

2月21日(水)から3月7日(木)までの16日間、アメリカで研修を行った。

初日は2回飛行機を乗り継ぎ、合計約15時間のフライトにより高知からエルムズカレッジまで移動した。最終到着地のハートフォードの空港では、夜遅くにもかかわらずエルムズカレッジの先生方がお手製のウェルカムボードと共に私たちを温かく迎えてくれた。この日から11日間、私たちはフレンドシップパートナーと共にエルムズカレッジの寮で生活した。それぞれのフレンドシップパートナーは自分自身の授業などの生活を送りつつ、空き時間や食事の時間などを私たちと一緒に過ごしてくれた。毎日のプログラム内容の中には、アメリカと日本の文化などの違いを感じられる体験や、アメリカにしかないものを知ることのできるものが多くあった。アメリカの休日を体験するイベントでは、イースターのようにクリスマスやハロウィンに比べて日本ではあまり馴染みのないイベントを体験させてもらうことができた。お世話になるエルムズカレッジのみなさんにぜひ私たちの日本食を食べてもらいたいと、ジョイス先生のご自宅を借りて3つのグループに分かれて日本食を作って食べてもらった。日本で事前に調味料を準備するなど計画していたものを無事に実行することができ、みんなの喜んでくれている顔を見ることができた。研修中には学校内の研修だけではなく学校外での活動も多くあった。みんなで黄色いスクールバスに乗ってショッピングモールに行っていたり、地元の小学校、地域の大きな病院や福祉活動を行う施設などの見学に行った。現地の小学校や病院など、中々見学することのできない施設を実際に自分の目で見て、話を聞いて学ぶことができた。病院で勤務中の看護師さんから話を聞くことが出来たり、小学校では実際に小学三年生のクラスに行き交流をしたりと、たくさんの貴重な体験をすることができた。学校内での英語の授業ではアメリカの文化に関する内容を学んだ。それらはその英語の授業外でのイベントや授業の内容に基づいているものが多く、自分たちが実際に学んだ文化の違いなどに沿って授業が進んでいった。座学だけではなく、フレンドシップパートナーと一緒にお題に書かれた場所を探しメンバー全員で写真を撮ってまわるスピードを競うものや、実際に料理を食べて食文化に触れる授業などがあった。アメリカの皆さんに日本文化を知ってもらうために、ひな人形を飾ったり、折り紙を教えたり、墨でアメリカの方の名前を漢字で書いたりした。食堂の一角で行ったイベントだったが、想像以上に多くの人が立ち寄ってくれた。修了式では私たちがスピーチを行い、研修の証明書を受け取った。フレンドシップパートナーと先生方が温かい言葉と共に祝福してくれた。

研修の最後の4日間はボストンへ移動し観光した。赤レンガ造りのビーコンヒルの街並みのなか散策をしたり、電車に乗ってハーバード大学を見に行ったり、クインシー・マー

ケットで食べ歩きをしたりと、自由な時間を過ごした。

最終日の出発は早朝3時前だったが、帰りは合計約17時間のフライトを終え無事に研修を終えることができた。

2) 研修での学び・気づき

実際にアメリカで研修を行うことで、たくさんのアメリカの文化の違いを学んだ。

日本の学校は日本人がほとんどで、大体の生徒の親も日本人である。しかし、英語の授業で、アメリカは様々な国の人がいることを知った。実際にフレンドシップパートナーやジョイス先生の親や先祖はアメリカとは違う国出身であるという人もいた。日本での事前学習やエルムズでの授業で、アメリカの南北戦争で多くの奴隷や移民の問題があったことを学んだ。ボストンを訪れた際には街の中に独立戦争に関する記念碑などがいくつかあり、それらはアメリカにとってとても大きく重大な出来事であったのだと気が付いた。しかし、今では様々な国の人が同じように暮らしていると分かった。授業を受けて気になってフレンドシップパートナーに出身を尋ねてみると、アメリカ出身でない人や、アメリカ出身ではあるが両親や先祖はアメリカ国外であるという人も多くいることを知った。彼らは国籍や性別、年齢などは全く関係なく、対等に接していた。アメリカ人の明るく親しみやすい性格だからこそ、今こうしてみんなが同じように生活できているのではないかと感じた。

実際に Baystate Medical Center に見学に行かせてもらった。そこではほとんどの病室が個室であり、多くの部屋が複数人一緒である日本とは違うということを学んだ。他にも、看護師の役割ごとにスクラブの色が分けることで医療従事者同士だけでなく患者さんにも分かりやすくしていること、患者さんの状態によっては自分で好きな食事を選ぶことができたり、看護師に言えばスナックをもらえることなど、日本とは異なる点が多くあった。スクラブの色を区別することは医療従事者にとっても、患者さんにとってもとても有効なことだと学んだ。制限の多い入院生活の中で、体の状態に合わせてではあるが患者さんに食事を選ぶ楽しさがあることや、少しのスナックを食べ息抜きできることは、患者さんの精神的面での健康を保つためにも重要であると思った。看護師を比べても、日本ではみんなが髪をくくっているのに対し、アメリカでは長い髪をおろしていた人もいた。このように、病院のスタイルにも大きな違いがあることを学んだ。

アメリカ人は日本人に比べて社交的で感情豊かだと感じた。彼らは当たり前のように出会った人に明るく挨拶をしていたり、誰かのためにドアを開けてあげているのを見て私は驚いた。ハンバーガーショップの定員さんがみんなで歌を歌っていたのを見て、日本では決して見られないことだと思った。しかし、彼らの楽しそうな姿を見てるとこっちまで楽しい気分になれた。ラテンダンスをみんなで踊ったときには、大勢の人がみんな見ているような場でも恥ずかしがることなくそれぞれ思い思いのダンスを踊っていた。少しためらっていた私たちを見かけた時には優しく声をかけ、一緒に輪の中にいれてくれた。みんなが同じ空間で楽しむということは彼らにとって重要であり、当たり前のことなのだと知った。アメ

リカでの生活を通して、自分の感情を表現することや元気に挨拶をすることはみんなと関わっていくためにとても重要なことなのだと学んだ。

寮で生活をしている学生も、それぞれが別々の生活スタイルを送っていた。寮生活というと、中々生活に制限が多いように感じていたが、夜遅くまで起きて共有スペースで話したり、昼にお風呂に入ったりと、自由に生活していると感じた。寮で暮らしていても、彼らに自由があることはいいことだと思った。また、彼らは学年関係なくみんなと同じように関わっていると感じた。日本では年齢は重要視されるが、彼らはみんな関係なくコミュニケーションをとっていた。初めて会う私たちにも気軽に接してくれ、とても嬉しかった。

実際に一緒に生活をしてみて、アメリカの学生は本当に社交的だと感じた。知り合いに出会えば必ず元気に話しかけたりしていた。知らない人でもドアを開けてあげていたり、彼らは日本人に比べて優しくて社交的だと感じた。

アメリカではレストランやホテルで働く人にチップを払う文化があった。他にも、路上でチップをもらえるのを待つ人がいたり、路上でコンサートをしている人に多くの人がチップを払ったりと、寄付の文化が根付いているということに気が付いた。Northampton の街で買い物をした時には古着屋や古本屋にたくさんの商品が並んでいた。私のフレンドシップパートナーは大の洋服好きであったが、よく古着屋で商品を購入し、ある程度着たらそれをまた古着屋へ売りに行きそこでまた古着を購入すると言っていた。福祉活動を行う施設を見学させてもらったときには、経済的に苦しい人を支援するために多くの食品や衣料品などが安価で受け取れる場所があった。子供が大きくなり着ることができなくなった服などをそこへ持っていき、それらを必要とする人たちのために役立てていた。服など自分にとって不要になった者は捨ててしまうのではなく他の誰かのために寄付しようという行動が困っている人の生活を支えるために重要なことであると学んだ。

3) その他

この短期研修では、実際にアメリカに行って生活することでしか得られない貴重な経験をすることができた。文化や生活の違いを体感することで、国同士の違いというものとはとても大きいものであると同時に、その違いを知ることはとても面白いことであると知ることができた。そして、なかなか言語がうまく通じない中、自分の言葉で相手に思いを伝えられたときはとても嬉しかった。これからも英語の学習により励み、異文化に触れることで自分の知識や考えを深めていきたい。

4) 写真



2023 年度エルムズカレッジ短期派遣研修

文化学部・223005 A.Y

1) 活動概要

【2月21日（水）】高知龍馬空港→羽田空港、約12時間のフライトで羽田空港→シカゴ空港、約2時間のフライトでシカゴ→ハートフォードに到着。空港からは現地の先生方の車でエルムズカレッジまで移動。大学で出迎えてくれたフレンドシップパートナー（FP）と対面し、そのまま自分の寮に移動して、FPに寮や部屋の案内をしてもらった。

【2月22日（木）】朝に初めて食堂でご飯を食べた。食堂はバイキング形式で朝昼夜利用でき、日や時間帯によって食べることのできるメニューも少しずつ違った。サンドイッチやベーグル、ハンバーガーなどは自分の入れたい具材を伝えてその場で作ってもらう形式で、どのメニューもとても美味しかった。朝昼夜それぞれの食事カードをまとめて購入して基本的に研修中の食事は食堂を利用していた。午前中はIDカード（寮に入るときに使用）の作成やオリエンテーション、キャンパスツアーを行い、大学の施設を案内してもらった。午後からは初めてのUOK Englishの授業があった。平日は毎日1時間から1時間半程度Joyce Hampton先生の授業を受けて、アメリカの移民の歴史や日本とアメリカの文化の違いなどを教えてもらった。夜にはゲームパーティーがあり、FPとビリヤードやアメリカのボードゲームを楽しんだ。

【2月23日（金）】昼から大学のBlack Exp Summitに参加して、黒人差別に関する映像を見たりゲストのスピーチを聞いたりした。夜にはAmerican Holidayのイベントがあった。エルムズカレッジの学生が飾りつけなどの準備をしてくれて、卵を探すゲームをしたり卵にペイントをしたりと日本にはないイースターの行事を体験したり、みんなで一緒にクリスマスの歌を英語バージョンと日本語バージョンの両方で歌ったりした。

【2月24日（土）】お昼にFPに車でカフェと広い公園に連れてってもらって、その後に大学内の体育館でバレーボールの試合を観戦した。夜はJoyce Hampton先生の家を訪れて肉じゃがやお好み焼き、餃子など日本食を作ってみんなで食べたり、ゲームをしたりしてホームパーティーを楽しんだ。

【2月25日（日）】バスでHolyoke Mallに行っていていろいろなお店を見て回ったり、フードコートのような場所でお昼ご飯を食べたりした。夜は大学の図書館内にあるホールでカラオケパーティーをした。

【2月26日（月）】午前中はBaystate Medical Centerという病院を訪れて、病院内の施設を案内してもらい、日本とアメリカの病院の違いを学んだ。夜はFPにRed Robinというハンバーガー屋さんと土曜日に行ったショッピングモールに連れてってもらった。

【2月27日（火）】Japanese Celebrationsでひな祭りの飾りつけをしたり、折り紙を教えたり、エルムズの学生の名前を習字で書いたり日本の行事をエルムズの学生に体験してもらった。午後はアイルランドのダンスを教えてもらったり、よさこいをエルムズの学生と一緒に踊ったりした。夜はエルムズカレ

ッジのダンス部の練習に参加して、その後にバレーボールの試合を観戦した。

【2月28日（水）】午前中はアイルランドについて教えてもらって、その後に大学内の教会に行った。夜は Goodbye dinner があり、食事を楽しんだりこれまでの研修について、また FP に向けてのスピーチを行ったりした。

【2月29日（木）】午前中はバスで Bowe Elementary という学校に行き、日本とアメリカの学生生活の違いを学んだり、子供たちに折り紙を教えたりした。夜ご飯は FP と Chick-fil-A というお店でハンバーガーを食べた。夜は Latin Dance Night があって音楽にあわせてダンスを楽しんだ。

【3月1日（金）】朝は徒歩で Good Works というカフェに行き、ベーグルを食べた。その後にバスで Providence Ministries を訪れて、NPO 団体によるフードバンクなどの取り組みについて教えてもらったり実際に NPO 団体が支援している家を案内してもらったりした。夜はタコスを食べた Ice cream sundaes も作った。

【3月2日（土）】午前中は Springfield Museums を訪れて、午後は Northampton に行きお昼を食べたり服屋さんや雑貨屋さんに行ったりした。エルムズカレッジ最後の夜はピザパーティーがあった。

【3月3日（日）】朝の7時に大学を出てバスでボストンに移動した。先にホテルのチェックインを済ませてからホテルの近くのタコスのお店で昼食をとった。ホテルは Wyndham Boston Beacon Hill というホテルで2人部屋だった。ホテルのすぐ横にはスーパーと CVS があった。その後はリスがたくさんいる大きな公園を歩いたり、Boston Public Library という素敵な図書館やアイスクリーム屋さんに行ったりした。夜は韓国料理屋さんでビビンバを食べた。

【3月4日（月）】朝はホテルの横にある Flour Bakery+Café で朝ごはんを食べた。その後に地下鉄を使ってみんなでハーバード大学に行った。服や帽子、本などハーバードのグッズがたくさん置いてあるお店があってたくさん買い物をした。お昼は Mr. Bartley's Burger Cottage でハンバーガーを食べた。昼からは自由行動で Quincy Market でクラムチャウダーを食べたり買い物をしたりした。ホテルの横のスーパーにはケーキがたくさん売られていて、そこでカップケーキを買ってホテルで食べた。

【3月5日（火）】今日は1日自由行動で午前中はニューイングランド水族館に行った。午後は服屋さんや雑貨屋さんで買い物をした。夜は日曜日のお昼に食べたタコスがとても美味しかったので同じ店で同じメニューを頼んだ。帰りに DUNKIN というお店でドーナツを買って帰った。このお店は大学の近くや空港、街中にもたくさんお店があって、値段も安くとても美味しいので何回も通った。次の日は朝早かったのでパッキングを終わらせては早めに寝た。

【3月6日（水）】朝の2時起きで3時にホテルを出発して、バスで空港まで行った。ボストン空港→ワシントン空港までの飛行機に乗って、次の羽田行きの飛行機の時間まで5時間ほどあったので、ワシントン空港で DUNKIN のドーナツを食べたりチュロスを食べたりした。約14時間かけてワシントン空港→羽田空港、羽田空港→高知龍馬空港で3月7日（木）の夜の20時ごろに高知に到着した。

2) 研修での学び・気づき

この研修での1番の気づきはアメリカと日本の文化の違いである。言語はもちろんのこと、食文化や通貨、挨拶の仕方や考え方の違いなど日本との違いを感じる部分ばかりであった。まず、食文化は行く前から想像していた通りどの食べ物も特にハンバーガーとピザが大きくて量がとても多く、お菓子や飲み物はカラフルなものが多かった。日本では一汁三菜という言葉があるように健康を意識した食事が取り入れられているのに対し、アメリカでは基本的に好きなものを食べて健康に良いかどうかは自己責任という食事のスタイルであり、日本とアメリカの食の価値観が少し違うように思った。日本に比べると味が濃いものが多いが、私はアメリカの食べ物がとても美味しいと思った。通貨はドルとセントであるが、硬貨のほうと同じ色をしていて見分けるのが難しく、なかなか覚えられなかった。特にアメリカでは日本と違ってチップの文化があるので、お店によって払い方やどのくらい払えばいいのかということも難しいなと感じた。しかし、先生から店員さんは低賃金で働いていてチップが生活の支えになっているということを教えてもらったので、値段の約20%をチップとして払うようにしていた。また、アメリカの大学に通ってみて日本と違うと感じたのは、学生が多国籍であり、様々なバックグラウンドを持っていることである。アメリカには移民の歴史があることから、留学生だけでなく、祖父母や両親が元々〇〇の国の人であるという学生が多く、見た目も日本に比べて多種多様であると感じた。さらに、アメリカの学生は日本の学生と比べてフレンドリーで学生同士や先生ともよくコミュニケーションをとっていたり、街中でも列に並んだ前後の人同士が話していたりして、アメリカでは当たり前のことなのかもしれないが、私はこの文化がとても素敵であると感じた。英語の面においては、これまでも日本で英語の勉強を頑張ってきたつもりではあったが、実際に英語しか通じない状況に置かれるとリスニング力やスピーキング力がまだまだであると感じることも多かった。しかし、研修中は常にFPと英語でコミュニケーションをとっていたので、初日と比べて話せることや聞き取れることもどんどん増えて英語で会話することが英語の上達への1番の近道であると感じた。また、失敗して学ぶことも多く、自分の知っている単語を使ってコミュニケーションをとろうとする姿勢が重要であると感じた。

3) その他

私は英語が得意なわけでもなく、海外に行くのも初めてであったことから、不安なこともたくさんあり、この研修に参加することに勇気がいった。しかし、実際にこの研修に参加して様々な貴重な体験をさせてもらい、今ではこの研修に参加することができて本当に良かったと思う。現地の学生と一緒に生活することに不安もあったが、FPや先生はわかりやすいようにゆっくりと喋ってくれたり、とても親切にしてくれたりして毎日安心して楽しい生活を送ることができた。もちろん日本にいてもアメリカについて知ることや英語を勉強することもできるが、アメリカの文化やコミュニケーションの取り方など実際に体感して学ぶことがたくさんあり、自分の視野を広がるきっかけになった。一方、研修中に自分の言いたいことがうまく伝えられないなど自分の英語力がまだまだであると感じることもあり、もっと英語が話せるようになりたいと強く思うようにもなった。残りの大学生活でもアメリカで得たチャレンジ精神とこの貴重な体験を忘れずに、英語の勉強を続けてもっと自分の英語力を向上させていきたい。

4) 研修先の写真



1) 活動概要

2月21日から3月7日までの約2週間の研修期間中、約1週間半をマサチューセッツ州にあるエルムズ大学で過ごし、最後の3日間はボストン観光を行った。エルムズ大学での生活は2人のフレンドシップパートナー（以下FPと示す）を中心としたエルムズ大学の学生やFPの学生たちの協力のもと、充実した時間を過ごすことができた。

毎日朝から夜の9時くらいまでは活動プランが組まれていて、日本人学生とそれぞれについているFPたちと行う活動が組まれており、日本人学生達に教えてくれる特別な英語の授業（ESL クラス）が毎日午前か午後かにあって、それ以外の時間は色々なアメリカの異文化を勉強・体験したり、エルムズ大学内でのキャンパスツアーや男子バレーボールチームの試合の観をしたりする時間、自分のFPや他のFPや日本人学生たちとも一緒になってどこかに出かけたり、遊んだりする時間がプログラム内にたくさん組み込まれており、忙しくありつつも楽しく充実した時間を過ごし、かけがえのない時間を日々体験できた。英語の授業では、アメリカの歴史や場所、人々などを日本と比較しながらみんなで一つ一つ文化の違いを考える中で、英語での会話の中で言い回しや表現の仕方の勉強も行った。英語の授業以外では、Bay state という大学の近くにある大きな病院の見学・案内、幼稚園・小学校が一緒になった学校の見学や子ども達との交流、ドラッグ中毒になった人や生活に困った人を助けるための NPO 法人のような場所で話を伺ったりした。また、学内では、アメリカの休日や祝日を体験するプログラムで各テーブルでそのイベントを擬似体験する時間もあった。「イースター」のイベントの一部で校内に隠されたお菓子の入ったイースターボールを探すのが意外に簡単さと難しさがちょうどよく、体を動かしながら楽しめて面白かった。こうしてアメリカの文化を学んだり、体験したりした一方で、日本食パーティーで自分たちがグループに分かれて日本食を作り、それをFPたちや先生方に食べてもらったり、よさこいやひな祭りのイベントをアメリカの学生達と体験できたことがとても嬉しかった。さらに、学生の名前を漢字に変換して筆で半紙に書いてあげるイベントも行った。

週末は大きなショッピングモールにみんなで出かけてアメリカのコスメやブランドを紹介してもらったり、FP達のおすすめのお店でショッピングを楽しんだり、アメリカンフードをいくつも挑戦したりして有意義に過ごした。自分たちが日本の文化を楽しんでもらって嬉しかったように、アメリカの学生達も日本人学生がアメリカの文化や食文化に挑戦する姿を見て楽しんでくれていて、その時間が一番盛り上がっていたように感じた。また、最後の週末にノースハンプトンという街に出かけてショッピングを楽しんだ。この街は私のFPが大好きな街だったようで、最初の頃からずっとこの街の話を部屋でしていたので、色々なお店に連れて行ってくれた。1つの場所に4つの博物館が建ち並んでいて、一度にいくつもの博物館を楽しめる場所があったことがとても印象に残った。

ボストンでは、ハーバード大学やクインシーマーケット、ニューイングランド水族館など有名な場所を中心に足を運んだ。クインシーマーケットでは有名なクラムチャウダーを堪能した。鉄道があまり発達していなかったが、歩いて街を散策できたことで、戦争の時に相手が攻め込んできたことを知らせたことで銅像になった人物を知れたり、今のアメリカができるまでにアメリカのために貢献した人、アメリカを救った人は国家のヒーロー的な存在になっていたりと知れた。ボストンは街並みにも歴史的な背景が関係しているところが多くあると知り、もっと勉強してみたいと思うきっかけとなった。

2) 研修での学び・気づき

この研修を通してアメリカの「チップ文化」、「挨拶や思いやり精神」、「物事の捉え方」、「食品ロスに対する日本との価値観の違い」に、学びや気づきがあった。アメリカには、主にレストランなどで店員に対して

チップを払う文化がある。日本には馴染みのない文化のため最初は払うことへの戸惑いやいくら払えば良いのかが分からず、その文化をきちんと理解することができていなかったが、アメリカは給料が安いし、元々チップをもらうことを前提にした値段設定だったりするという話を聞いて少しずつチップ文化に対して理解ができるようになっていった。また、渡米前まではアメリカ人は日本人ほど挨拶をしないだろうなと思っていたが、エルムズ大学内で FP 以外の学生からもよく挨拶をされ、挨拶に加えて気分を聞いてくれることも多く、コミュニケーションを取ろうとしてくれる人がたくさんいることに驚くと同時に、日本人よりもフレンドリーさがあるのではないかとまで感じた。さらに、実際に現地の人々と公共の場で接した際、ほとんどの人が扉を開けてくれ、こちらが「ありがとう」と言うのと「どういたしまして」と返してくれたことにも驚いた。日本人は「ありがとう」さえ口に出さないシャイな人が多いけれど、アメリカ人はそこでも言葉のキャッチボールがあるのだと感じ、「みんな友達みたい」と感じるのはこうした常にオープンハートな部分が国民性としてあるからなのではないかなと思った。そして、この研修を通して、アメリカの人達は日本人が思っている以上に親切な人も多いことに気がついた。私が失敗をしてしまった時、ルームメイトやその友達達はいつも「謝らなくていいよ」「全然大丈夫だよ」などと励ましてくれて私が立ち直れるまでずっと側にいて励ましてくれていて、いつもポジティブに物事を捉えている姿勢や明るく前向きに意識を持っている姿に人として尊敬したいと感じた。彼らと共に生活をする中で何でも明るく前向きに考えることで物事の感じ方がどんどん変わっていく自分にも気がつくことができ、時には楽観視も必要なんだと現地の学生達をみて学ぶことができた。しかし、「食品ロスに関する価値観」が全く異なることには非常に驚いた。日本人は若い世代から大人まで幅広く食品ロスを減らすべきという考え方を持っていたり、その考えを教育されたりするため、バイキング方式の食事でも自分が食べられる分だけを取るなどの意識があるが、エルムズ大学の学食で目の当たりにしたアメリカ人の食事スタイルは、食べたいものを食べられるだけ取り、途中で満腹になったりもう食べられなくなったりしたら簡単に食べものを捨てていた。そのスタイルが現地では普通のことだと教えてくれ、無理をしてまで食べなくても良いと言われたが、最初は理解するのが少し大変だった。ただし、「もし食べられなかったら残してもいい」というアメリカンスタイルだったからこそ、思い切って色々な食べものにトライできていた部分はあるように感じた。また、アメリカの学生達の生活習慣にも驚きがたくさんあった。すべての FP や学生に当てはまるわけではないが、寮で共同生活を送っていた FP 達がほぼ毎日、深夜までカードゲームをしたり e-sports をしたりしていて、時には時間を気にせずハンバーガーやピザを頼んで夜通し友人達と遊んでいて、学校がある普段からかなりの夜型な生活スタイルに驚いた。ここでも考え方や習性の違いを感じられたように思う。日本人は色々な面で、共に生活をする人や共に働く人といった自分の周りの人に合わせようとする習性があると感じるが、アメリカ人は、「人それぞれでいい」と考えるのが一般的だと考えているように感じた。私は、日本人は他者に流されないようにするために「自分は自分。人は人。」というように考えることがあると思うが、アメリカ人はどちらかというと、流される、流されないというよりは、「人は人。自分は自分。だからみんな違っていいよね」と考えているように思えた。いつも「あなたは何かしたい？ どうしたい？ どう思っている？」という風に相手の意見に耳を傾けてくれて、相手の考えに対して理解を示した上で「じゃあ、私はこうするけどあなたはこれでいいよ」と自分の意見もしっかりと伝えてくれるアメリカ人の子達と接していくうちに段々と、自分は自分でしっかりと意見や考えを持っているように思えるようになったし、自分を創らなくていいと感じるようになった。このアメリカ研修を通して、いつの間にか自分に正直になれていない時があると気づくことができたのは成長に繋がったと思う。

私は、この研修期間中に自分から積極的に話しかけ、会話を続けようと頑張れたことで、現地の学生たちとのコミュニケーションを楽しむことができ、自分が伝えたいことをきちんと伝えられるかが不安で話しかけられずにいては、伝わるかどうか分からないので、まずは何事もトライしてみることが大切だと学ぶことができた。

3) その他

私は、この研修に参加をして自分の夢に対しての考え方に変化があった。私は将来客室乗務員になりたいという夢を持っており、研修前は乗客に忘れられない素敵な空の思い出を作ってもらいたい、乗客を喜ばせるために何かをしたい、そんな風に自分の理想とする客室乗務員の姿を作り上げていたが、この研修を通して初めて国外の航空会社を利用し、短期ではあるものの外国で生活をした中で、国籍や性別に限らず、一人一人違うバックグラウンドを持った乗客に対していかに適したサービスが行えるかが重要であるかを考えるようになった。外国人も多く搭乗した機内でそれぞれの過ごし方と客室乗務員のサービスの仕方を観察し、一人一人違った価値観の乗客に合わせた最低限のサービスを提供する中でしっかりと乗客のニーズを掴み、求められた時にそのニーズに合ったサービスを提供するシンプルさも必要な世界であると感じた。日本人のようにおもてなしや気配りを好む人もいれば、なんでも自分で決めたい、考えたいと思う人もいて学ぶことができた。普段、国内にいる時は利用することができない外資系エアラインを利用できたことで、大きな学びを得ることができたと感じる。

最後に、今年度の研修を通して次年度にこの研修に参加される学生の方へのアドバイスとして、一番に日本で飲んでいる自分に合った薬や風邪薬等を十分に持参することと、アメリカの乾燥した気候に対応できるようにマスク等を持参することをおすすめしたい。特に、エルムズ大学内での生活で、寮内は比較的暖かいけれど外は寒い日など気温の温度差や乾燥で風邪をひきやすくなったり、喉が痛くなったりすることがあるため、普段の見慣れている薬や安心して飲める日本の薬を持っておいた方が安心して自分の体調の変化に対応できると思う。のど飴などは大学近くのドラッグストアなどで購入できるが、薬は日本のものが良いと感じた。FPの学生や先生方が体調などをよく気にかけてくれるため、何でも正直に言った方が良いのではと感じるかもしれないが、あまりにも正直に体調の変化を伝えすぎると大事になるので、ある程度は自分で対処できるようにしておく自分の気持ち的にも楽だと思えるので、備えは必要だと思った。

この研修プログラムを通して、初めて外国へ行き景色や人、何もかも新鮮で驚きばかりの毎日を送りながらも本当にたくさんの刺激をもらうことができた。もっと外国の人と普通に会話ができるようになりたい、切実にそう感じたので、帰国して満足せず、英会話を中心にもっと英語の勉強に力を入れたいと心から思えるようになった。

4) 研修先の写真



